

国語問題紙

法学部1・2部

人文学部1・2部（日本文化学科）

2025年2月12日

法学部1・2部, 人文学部2部（日本文化学科）は 11:50～12:50（60分）

人文学部1部（日本文化学科）は 11:50～13:00（70分）

注意事項

1. 国語の問題紙は全25ページである。

問題は受験する学部（1・2部の区別を含む）によって異なる。受験者は下表にしたがって問題に解答すること。

学部名	問題
法学部1・2部 人文学部2部（日本文化学科）	□ □
人文学部1部（日本文化学科）	□ □ □

2. 解答はすべて選択肢の中から選び、その番号を解答用紙（マークシート）の指定された欄にマークすること。
3. 試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。
4. 試験終了まで退室してはいけない。



一

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

明治から昭和にかけ、礼儀作法について書かれた「礼法書」が数百点も刊行されたというが、その結果（成果？）として、現在の日本で標準的として公的にショウウ^a励される生活も、それら礼法書の示す形にかなり沿ったものとなっている。朝起きてから夜寝るまで、起床と就寝そのものから、食事の開始と終了、人との出会いと別れ、等々、既定の人間関係の中でくり返される相互行為——これは英語の interaction の日本語訳である——がことごとく、それぞれ専用の表現（あいさつ言葉）によって仕切られることとなった。あらためて挙げるまでもないが、「おはよう（ございます）／おやすみ（なさい）」「いただきます／ごちそうさま（でした）」「行ってきます／ただいま」「こんにちは／さようなら」等々、私たちの生活はあいさつ言葉の対で満たされている。標準語の制定と並んで、「標準作法」の制定も、政策的にはかなりの成功を収めたと見るべきだろう。

一応確認しておけば、社会的な人間関係は親^bも上下も多様にあるはずだが、このあいさつ規範は家族内でも例外とはならない——作法書がくり返し説いていたとおりに。A、家族内でもそれをしないことははっきりした叱責の対象となる。起床のあいさつがなければ「朝起きたら「おはよう」でしょ！」と言われ、食事の後黙って立てば「ごちそうさま」も言わずに席を立つとは！」と言われ、就寝のあいさつをせずに寝たら「おやすみ」も言わずに寝た」と言われることになる。①

逆に言えば、お決まりのあいさつがいつもどおりに交わされているかぎり、その人間関係については安心してよいものと見なされる。B、そもそもあいさつ自体は実質をあまり持たないものだとしたら、あれば良し、なければ悪しであって、ひとたびあいさつがないとなると、安心の印がそのまま落ちてしまうことになる。『あいさつがない』ということにこの社会が神経質そうに見えるのは、こうした事情が関係していそうに思われる。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災後、かなりの期間にわたってテレビやラジオでのCMが大幅に自粛され、その埋め草として「ACジャパン（旧公共広告機構）」のCMが繰り返し流されたことは、まだ記憶に新しい。なかでも、「あいさつの魔法」と題されたCMは、さまざまなつながりの喪失と回復という報道のテーマにも沿うと感じられたためか、印象も強く、また世の話題にもなった。

あいさつをするたびに友だち（「キャラクター」）が増えてゆく。だから、会う人ごとにあいさつをして、あいさつの数

だけ友だちを増やそうね、というメッセージは単純明カ^cいにさえ見える。「たのしいなかがポポポポーン」という擬態語の表現は、当初ウェブページで見ることのできた英語版字幕では、“Fun-loving friends suddenly appear”となっていた。なるほど、楽しい仲間が不意に現れるのである。

この「ポポポポーン」に、日本のあいさつ文化の、もしそう言うてよければ²一つの幻想が、象徴されているように思える。すなわち、あいさつは「善」である、あいさつは人をすがすがしくする、あいさつをすれば友だちができる、等々、ここではあいさつが善悪や好悪といった価値尺度の上に置かれている。ひとたびあいさつを交わしたら、知らない人でも昔からの知己のように思われ、話が弾んで本当に友だちになることさえあるだろう、というように。しかし、先に見た作法としてのあいさつは、人には丁重に接せよ、友だちでも家族でも例外なく、他人には失礼のないようにあいさつせよ、一等国の国民ならば、という趣旨だったはずではないのか？

②

この齟齬^{そご}からは、あいさつに対する二種類の異なった期待を読み取ることができる。明治政府が期待したあいさつの働きは、日本の国民がヨーロッパの紳士淑女のように品位を持つて人と接し、粗野な交わりを控えるようにするための、いわば対人距離を大きくして一定に保つ働きだった。それに対して、ポポポポーンのあいさつは、逆に、人と人を互いに近づけ親密にするような働きだと言っべきだろう。この二つは働きの向きが反対で、同時に両方が満たされるものではない。しかし現代に至る近代日本百年の中で、そのことは明確に意識されないまま、そのつどの都合に合わせて便利に使われてきた印象が強い。

まず、あいさつとは言語にとって何なのか？ ということを考えなければならない。あいさつは言語行為の一種である、と規定したら、異論なく賛同が得られるかどうかは微妙である。なぜなら、言語行為とは「言葉でもって何らかの行為を遂行すること」であって、たとえば、「お願いします」と言って依頼という行為をし、「約束するよ」と言って約束という行為をするならそのとおりである。だが、人はあいさつの言葉を言って何の行為をするだろうか？ あいさつという行為、というのがとりあえずの答えだが、それを答えとして認めれば賛同することになり、それは同語反復^{しりぞ}だと斥ければ賛同しないことになる。

依頼にせよ約束にせよ、それをする事で何か新しい情報が持ち出され確認されるだろう。しかし、あいさつに新情報は不要であり、あつて悪いことはないが、特段何もないのがむしろ普通である。たとえば、「おはよう」というあいさつは、せいぜいが「起きたよ」とか「今日初めて会うね」ぐらいの情報価値しか持たず、それとて、見ればわかるのだから

わざわざ言葉で表す必要はないとも言える——夕方につても「おはよう」と言う大学生なら「早い」という情報価値すら随意的だろう。「こんにちは」というあいさつは、「今日は……」の实质部分を取り去って形骸化させた形式である。ならば C。

これをどう考えるかが問題となる。言語学は人びとがどのように伝達価値のある情報を伝えるかに関心の中心とするのだから、それは必然的に「あいさつ以降」のコミュニケーションになるはずだとの考えからすれば、あいさつは言語学の研究対象ではないことになる。他方、そうではないと考えることもできる。コミュニケーションにおいては、新規に伝達すべき情報を乗せる以前に、相手と自分の間に不安定でない回路を確立し、あるいは確認し、あるいは維持することが必要であり——³ 諍い^{いさか}をしている相手との間で言葉が通じないのはこの回路が損なわれているからにはかならない——、あいさつの仕事はまさにその点にあるという考えである。この見通しを開いた学者として、ポーランド生まれの人類学者であるマリノフスキーと、ロシア生まれの言語学者ヤーコフソンの二人を外すことはできない。

マリノフスキーは、トロブリアンド諸島の「原始言語」において、情報伝達の用をなさない言葉を人びとがしばしば交わし、かつそれが人びとの生活にとって重要な意味を持つていることに注目し、そのような言語使用を「phatic communion」と呼んだ。直訳すると、「交感的な靈的交流」といった意味だが「交感的言語使用」と訳されることが多い。

交感的言語使用において、言葉はまずもって意味の伝達、すなわち言葉が象徴的に表す意味の伝達に用いられるのだろうか？ 断じてそうではない！ それらは社会的な機能を遂行するのであり、それこそが主たる目的である。だがそれらは、知的反省の結果でもないし、聞き手にあつて反省を喚起するともかぎらない。くり返すが、言語はここで思考の伝達手段として機能しているのではない。

(Malinowski 1923)

右で見たようなあいさつがこの交感的言語使用の例であることは明らかだろう。構造主義言語学の旗手の一人だったヤーコフソンは、言語の六機能説を唱えたことでも知られているが、マリノフスキーの phatic communion を引き継ぎ、「交話的機能 (phatic function)」として組み込んだ。呼びかけや応答、そしてあいさつなど、コミュニケーションの回路自体を焦点化する機能として、何かを指示しながら実質的な情報伝達を担う「指示機能 (referential function)」との

間に一線を引く。③

指示機能との対比で交話的機能を捉えるなら、通常のコミュニケーションでは、指示機能が活性化するための前提として交話的機能があると考えてよいだろう——交話的機能の純粹例が出てくるのは、何かの違和や異常を察知した際の確認としての「もしもし? 聞いてる?」のような場合である。フランスでは、“Bonjours”を言わなければ社会的な行為が開始できず——スパーでレジを打ってもらえない、郵便局で郵便を出せない——、“Merci”を言わなければ社会的行為を終了できない——レジのおつりがもらえない。あるいはまた、呼称が重要視される中国では、相手を適切に呼ばなければ関係を維持できない。④

コミュニケーションの一般理論として、指示機能と交話的機能という二段構えは上手い道具立てになっている。満員電車の中で独り話し続ける人がいても誰も応じないのは、その人が誰ともコミュニケーションの回路を作っていないからである。人とのやりとりがぎくしゃくしているとき、「いい? ちよつと最後まで聞いてよ?」のようなメタ・コミュニケーション的な言葉が多くなるのは、その後に発せられる言葉の内容を理解させるために、安定的なコミュニケーションの回路を確保することが必須だからである。このように、指示機能とは違う次元で、その前提条件として働く交話的機能を立てることに理がある。

指示機能と交話的機能の違いを、新規の情報伝達の有／無に求めるならば、比喩的に、指示機能は「話す」こと、交話的機能は「話さない」ことと置き換えることが許されよう。

「話せばわかる」といった言語コミュニケーションに対して、「話さなくてもわかる」といった非言語的コミュニケーションが存在する。人は、複雑、微妙な点はともかく、敬う気持ちを、言語を用いずに、立ち居振る舞いで表現することができる。その表現の仕方が礼儀作法である。

(注) 陶・綿拔監修二〇〇八、「刊行にあたって」

「話さなくてもわかる」ことをこの編者たちはもちろん肯定的に捉えているだろうから、ここでの引用の趣旨は方向がずれる。また、「話さなくてもわかる」のは非言語コミュニケーションの特性と捉えられているから、その点でもずれている。とはいえ、あいさつは、先ほど確認したように言語行為の枠の境界線あたり、情報伝達の実質とは最も遠いところにあるのであって、その点からすれば、⁵ あいさつが「話さなくてもわかる」コミュニケーションを体现すると見ることが

(注) 陶智子・綿拔豊
昭監修(二〇〇八)
『文献選書 近代日本
の礼儀作法』の刊行に
あたって書かれたもの
から抜粋。

できる。

では日本語のあいさつはどうだろうか？ 「おはよう」に対する標準的な返答は「おはよう」であり、「おやすみ」に対しても「おやすみ」である。同様にして、「こんにちば」には「こんにちば」、「さようなら」には「さようなら」で、その後には何かが来るという想定は随意的である。つまり、人びとはあいさつにおいて、あいさつしたという「印＝tokens」をやりとりしており、あいさつそのものには意味の実質は期待されない。⑤
ここまで見てきた近代日本のあいさつ文化は、

あいさつせよ（家族にも友人にも）「Ⅱ作法としてのあいさつ」

あいさつすればよい（知らない人にも）「Ⅱ『ポポポポーン』」

の二点を基本としていた。これらは交話的機能の領分にあり、指示機能に関してはあまり触れられない。あるとすれば、自分の才能や技芸はもちろん、家の権勢などを誇らしげに語ったりしないようにといった「べからず」的な応対の心得だった。そうすると、日本語のコミュニケーションは、交話的機能の独立性が相対的に高いことになる。そう言うてよければ、交話的機能の D —— もつといえ、言っていないことも言ったことになるということ——であり、かつそれを国家が推進した、と。

（滝浦真人『日本語は親しさを伝えられるか』による。ただし一部変更した。）

問一 傍線 a ～ c のカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の① ～ ⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

1

く

3

a ショウ励

1

- ① 突然、旅行に行きたくなり、ショウドウ的に計画を立て始めた。
- ② 長年の貢献が認められ、ヒョウショウ状を授与された。
- ③ 試験が近づき、ショウソウカンが募る。
- ④ 成績優秀でショウガクキンをもらう。
- ⑤ このお菓子のショウウミキゲンがそろそろ切れる。

b 親ソ

2

- ① 過去の失敗体験が、彼女の新しい挑戦をソガイしている。
- ② 新しい職場に馴染めず、いつも一人ぼっちで、ソガイカンを感じている。
- ③ 彼は殺人罪でキソされた。
- ④ 語学学習のキソは、とにかくたくさん聞くことだ。
- ⑤ 緊急事態に備えて、適切なソチを講じる必要がある。

c 単純明カイ

3

- ① 病気がカイホウへ向かう。
- ② この問題に関して、私は別のケンカイを持っている。
- ③ 長年の夢であった小説の出版の時に、カイシンの笑みを浮かべた。
- ④ 一年間カイキンで、記念品をもらった。
- ⑤ 彼は過去の過ちを深く反省し、カイシンしたようだ。

問二 空欄 A・B に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 4。

- ① A また B 例えば
- ② A また B だが
- ③ A だから B だが
- ④ A だから B また
- ⑤ A ところが B 例えば
- ⑥ A ところが B また

問三 本文には次の一文が抜けている。これを入れるのに最も適切な箇所を、本文中の空欄①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5。

これらはいずれも、その後に指示機能的コミュニケーションが開始されるために満たされるべき前提条件と見ることができる。

問四 傍線 1「こうした事情」とあるが、どのようなことを指しているか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 現在の日本社会において、あいさつは単なる形式的な行為を超え、社会的な慣習としての重要性が強調されており、礼儀としての「ベからず」的な対応の心得が存在していること。
- ② あいさつが欠如している場合、対人関係の円滑性が損なわれているのではないかと懸念され、相手との関係性や社会的な結びつきに対する不安や懸念が生じることがあること。
- ③ 親密な家族関係であっても、社会的な礼節や相互の尊重を適切に維持するためには、日常的な言語的あいさつ行為を欠かさず徹底することが不可欠であること。
- ④ 日常生活の中であいさつを行わないことは、相手との関係を邪険にしていると認識され、他者からの叱責や否定的評価の対象となり得ること。
- ⑤ あいさつは、政策的介入によって標準作法化され、社会全体で統一的な礼儀作法の一環として受け入れられ、実施されるようになったこと。

問五 傍線2「一つの幻想」とあるが、それはどのようなことか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① あいさつは、人と人を互いに近づけ親密にするという、よいものであると信じられていること。
- ② あいさつを行うことで、対人関係において適切な礼儀を示し、社会的礼節を保つことができると思われること。
- ③ あいさつには、礼儀や敬意を示したり、円滑なコミュニケーションを維持したりするだろうという二種類の期待があるということ。
- ④ あいさつは対人距離を大きくし一定に保つと同時に、人と人の絆を深めることが可能だと思われること。
- ⑤ あいさつが社会的調和や円滑な人間関係において不可欠であり、コミュニケーションにおける前提であると信じられていること。

問六 空欄Cに入る最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 「こんにちは」というあいさつは、その言語行為の背後に新たな情報の提供や意図の表明が含まれるものと解釈されるべきである
- ② 「こんにちは」というあいさつは、「おはよう」と同様に「今日初めて会うね」という情報を含んでいる
- ③ 「こんにちは」というあいさつは、単なる形式的な表現ではなく、伝達価値のある情報を含む行為として認識されるべきである
- ④ 「こんにちは」というあいさつは、既知の社会的慣習や礼儀に基づく重要なものであるため、新情報の提供を必要としない
- ⑤ 「こんにちは」というあいさつは、より一層新情報のない言葉だと言わなければならない

問七 傍線3「あいさつの仕事はまさにその点にあるという考えである」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① あいさつが思考や感情の伝達手段として機能し、相手に対する意図や態度を非言語的に表現する重要なコミュニケーション手段であること。
- ② あいさつが単なる形式的な表現にとどまり、何かを指示しながら実質的な情報伝達を担っており、対話の開始や関係の構築に関する重要な情報を暗示する手段として機能していること。
- ③ あいさつが新情報の伝達に先立ち、社会的な調和や円滑な人間関係の基盤を築くための、相互理解や信頼の形成に寄与すること。
- ④ あいさつがメタ・コミュニケーションとして、表面的な社会的礼儀や儀礼的な行為にとどまるのであり、コミュニケーションの意図を提供する役割を果たさないこと。
- ⑤ あいさつが相手との関係性の構築において、予測できない反応を引き起こし、不安定な回路を確立する可能性があるということ。

問八 傍線4「上手い道具立てになっている」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 10。

① あいさつが対話の開始や維持、相手との関係の構築に寄与する機能を果たし、双方向の対話における基本的な交流手段としての役割を担っていること。

② コミュニケーションに、伝達内容を表す指示機能と、相手との関係性を保つ交話的機能の両方があると考えていくことは、対話相手との人間関係の維持と意思疎通の仕組みを考える上で効果的であるということ。

③ 言語表現が具体的な知識やデータ、意図を相手に明確に伝達する役割を果たし、コミュニケーションの中で実質的な意味や内容を提供することができるということ。

④ コミュニケーションには、情報の伝達や指示を示す言語的行為と、関係性の構築・維持という社会的行為の二つの重要な役割のいずれが必要であるということ。

⑤ あいさつはコミュニケーションの機能として指示機能と交話的機能の両方を備えており、状況に応じてこれらの機能を使い分けることで、情報の伝達を行っているということ。

問九

傍線5「あいさつが『話さなくてもわかる』コミュニケーションを体現すると見ることができる」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

① あいさつは実質的な情報伝達をほぼ果たさないにもかかわらず、対人関係の確立や維持、さらには社会的調和の形成において重要な役割を果たす言語行為であるから。

② 毎回同じあいさつを交わし、恒常的に同一の内容の伝達を担うということで、コミュニケーションの一貫性と安定性を維持する役割を果たすから。

③ あいさつは家族など親しい間柄で交わされなくても、既存の信頼関係に基づいて自然に行われるため、新規の情報を以心伝的に伝達できるから。

④ あいさつは言語的な要素に依存せず、身体的なジェスチャーや表情、視線などを通じて感情や意図を伝達する手段であり、これにより直接的な言葉を使わずとも意味を表現しうるから。

⑤ あいさつは個々の社会的役割や地位を反映し、コミュニケーションの秩序を保つため、社会的な規範や文化的期待に基づき、他者との相互尊重や礼儀を維持する重要な手段であるから。

問十 空欄Dに入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 縮小化
- ② 肥大化
- ③ 抽象化
- ④ 具体化
- ⑤ 客観化

問十一 本文の内容と合致するものを、次の①～⑦のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 13・14。

- ① あいさつを行うことで友人関係が自然に形成されるという考えはあり得ないことであり、あいさつは対人関係の第一歩を築くための手段ではない。
- ② 日本では礼儀作法としてあいさつを実施することによって広範な友人関係が構築されるため、あいさつが人間関係において重要だと信じられてきた。
- ③ 日本においてあいさつには、作法として相手との距離を保つ働きと、それと相反する人と人を近づけ親密にするという働きを読みとることができる。
- ④ あいさつは情報伝達の観点からは安定的な回路の構築という限られた役割しか果たさないため、言語学的な分析や研究の中心にはならない。
- ⑤ 人はあいさつをすることで安心するため、心の安定においてあいさつはなくてはならないものであると著者は主張している。
- ⑥ 日本のコミュニケーションではあいさつを交わすことが重要であり、交話的機能の独立性が相対的に高いといえる。
- ⑦ 「礼法書」では家族内や親しい間柄においては、あいさつを省略しても人間関係には影響しないため問題ないとされている。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

言葉が登場するまで、人類のコミュニケーションはしぐさと音声による全体的な表現だった。類人猿と同じように、対面コミュニケーションは相手の感情を読み、相手を操作するうえで重要であるが、目がその大きな役割を担っている。人間の目は眼裂が横長で、白目と虹彩の色がちがい、目の動きがはつきりわかる。東京工業大学の小林洋美と幸島司郎は、人間以外の霊長類では眼裂が丸いことが多く、白目と虹彩の色の区別がつきにくいことを指摘している。人間の眼裂が横長なのは、地上で暮らすようになって水平方向の視野を広げる必要があったからだし、白目の部分が大きくめだつのは、目の動きによって相手の感情を読む仕組みが発達したからだという。

たしかに、ゴリラやチンパンジーは対面するとき、相手の目がみえなくなるような距離まで顔を近づける。目は黒つばい茶色で、白目の部分がなく、という距離からみても目の動きはわからない。彼らは目の動きではなく、顔と視線を合わせることで相手の気持ちを操作しようとしているにちがいない。

ところが人間は、一メートルの距離において対面する。会話をしたり食事をしたるときは長時間向かい合った姿勢をとるのがふつうだ。これは話をしたり食事をしたときに相手の顔をみることが重要であることを示している。向かい合うのは言葉によって情報を伝え合うために不可欠な姿勢ではない。事実、現在の私たちは電話やメールを用いて対面しなくても情報を伝え合うことができる。向かい合うのは対話や会話が感情の交流を必要としているからである。それは言葉だけではむずかしい。視覚的なコミュニケーションによって、とりわけ目の動きによってそれを読まなければならない。

ひょっとしたら言葉の始まりは情報交換ではなく、対面姿勢を長く続けることに意味があったのかもしれない。食事の場合も同様である。人間以外の霊長類ではけんかの源泉であった食物を、人間はわざわざ挟んで両者が向かい合い、同じ食物に手を伸ばす。これは人間にしかできない行為であり、共食が可能な許し合う間柄であることを前提にして、相手の目の動きを読みながら感情を共有することにつながっている。人間の目はこういった対面の機会を増やししながら、類人猿とちがうコミュニケーションの能力を付与していったのではないだろうか。

しぐさとともに、音楽も人間が言葉以前に発達させたコミュニケーションである。音楽は仲間どうしのきずなを強め、一体化する気持ちを高めて協力的行動をとるために大いに貢献した。現生人類がアフリカ大陸を出て季節変化の大きい環境

へ進出できたのは、音楽による共感力の強化にあつたのではないかと思われる。

そこに言葉が加わって、人間のコミュニケーションは大きく変化した。それまであいまいなことしか伝えられなかったしぐさに代わって、言葉ははっきりした意味を伝えることができる。その意味は時間と空間を超えて伝えられる。昨日起こったことをいましがた起こったことのように、遠い場所で行ったことを目前で行ったことのように表現できる。だから人間は、言葉を用いて自分にとって未知のことを他者の体験から学ぶことができる。また、言葉は世界や社会を比喻によってみる視点を提供し、ものや人を関係づけて解釈する能力をソクシンする。なによりも言葉はものごとの原因や結果への関心を助長させて目的意識を高める効果がある。そのため言葉は、農耕や牧畜のような遅延収穫システムが登場したとき、収穫の善し悪しの原因を過去にさかのぼって問い、その方法を改善し、新たな目標を立てる思考様式を推進したと思われるのである。

そして、それまでコミュニケーションの主流となっていた音楽と言葉が結びついたとき、人と人との感情の共有が目的意識に結びつくようになった。ホモ・エレクトスでもネアンデルタール人でもサピエンスの狩猟採集民でも、音楽はほかの仲間との境界を消して喜びや悲しみの感情を分かち合うものだった。それは結果的に人々の連帯意識を高め、分業や共同作業を推進しただろう。しかし、もともと音楽はそういった目的意識にもとづいて、歌ったり奏でられたりしたのではなく、純粹に感情の共有をめざしたものだはずだ。それが言葉と合体したとき、意味が付与され、目的をもって歌われるようになったにちがいない。死者を弔うため、収穫を祝うため、苦難を乗り越えるため、神に感謝するため、などである。

とりわけ音楽は、集団意識の高揚のために用いられるようになった。宗教の儀式に音楽は欠かせない。それはソウゴンな象徴物のもとに奏でられ、合唱するとき、いつそう効果を高める。ステンドグラスが散りばめられたカトリック教会でパイプオルガンが鳴り響く。人々が敬虔な折りをささげて賛美歌を合唱するとき、神の僕であるという同胞意識は最高潮に達する。同様のことはコーランが歌のように朗読されるイスラム教のモスクでも、声明の合唱が響き渡る仏教の寺院でも起こる。

為政者もこのような音楽の効果を最大限に利用した。楽隊を育成して、数々の儀式を荘重な音楽で飾り、豪華な劇場でオペラやコンサートを開いて人々を集めた。音楽は見ず知らずの他人を権威のもとに集合させ、連帯感を高めて権力へ奉仕する精神を引きだすために用いられるようになったのである。首長制社会や国家は戦士の統率をはかるため、戦いへの

恐怖を取り除き、戦闘意欲を高めるために音楽を多用した。二つの世界大戦で、日本の政府がおびただしい数の軍歌を普及させたことは記憶に新しい。イギリスもドイツもフランスもアメリカ合衆国も、勇氣をコブ^(ウ)する行進曲や国歌をつくり、戦争や独立への士気を高めたことは歴史に深く刻まれている。言葉と結びついた音楽は、それまで連合することなど考えられなかった他人どうしを結びつけ、社会のために命を捨てて奉仕するような精神の育成に貢献したのである。

言葉が音楽と結びついたのは、言葉がまだできて日が浅いコミュニケーションであるからだ。情報を伝えるには便利だが、人々を信頼させ連帯させる力はない。視覚や接触に頼るコミュニケーションのほうが心を動かす力は強く、意味を含意しない音楽のほうが感情に訴える効果は大きいのである。たんに言葉を交わすより、みつめ合い、手を握り、肩を組み、抱き合うほうが感情は強く伝わるし、相手の心に訴える効果は大きい。だから、言葉を用いて相手との関係づくりをする場合には、相手の顔をみたり声を聞いたりしながら対話や会話を行うことが不可欠だったのである。

^C文字は言葉を化石化し、繰り返しや保存を可能にする耐久性の高い装置である。最初の文字はいまから五五〇〇年前の西南アジアに楔形文字として登場した。しかし、文字は粘土板、皮、紙といった媒体に記されて利用されたので、声による会話ほどすばやく相手に伝えられる手軽な手段ではなかった。むしろ、所有や交換のための証文や、共同作業の分担や手順を明確化するマニュアルとして用いられたのだろうと考えられる。やがて文字はできごとを記録し、歴史を編纂するために使われ、手紙や通達として直接声の届かない相手へ時間と空間を超えて伝える手段となった。

しかし、近年になると言葉の役割は大きく変わった。通信技術の進歩によって遠距離のコミュニケーションが可能になると、言葉の主たる目的は情報の伝達となり、信頼や関係づくりではなくなった。近年のインターネットや携帯電話の普及はその傾向に拍車をかけた。グーグルやヤフーなど巨大なデータベースがあつて、その内容はつねに更新されている。世界のできごとを伝える多様なニュースに無料でアクセスでき、キーワード検索を使って自分が知りたい情報を簡単に得られる。チャットやフェイスブックをつうじて自分の好む相手とめぐりあい、会話を楽しむことも可能だ。必要ならスカイプなどを駆使して相手の映像を同時発信でみることができる。こういった多様な方法で情報取得や会話が可能になると、それに時間をかけることがやっかいに思えてくる。会って話ができる距離にいても、会わずに携帯電話を用いて話をする人が増えるのは当然の帰結といえる。その結果、対面して話をする機会は減少し、ひきこもりという新たな生活スタイルが登場した。相手の目の動きを手がかりにして心の動きを読む能力も失われつつあるのではないかと思う。

現代の人間に対面コミュニケーションが必要なくなったというわけではない。これは現代の科学技術が人々の負担を減

らし、効率のよい生活設計のなかで自由な時間を広げようとした結果なのだ。近代日本を象徴する三種の神器（白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機）は家電製品の爆発的流行をもたらした。それまで多くの労力と時間をかけてきた家事が短時間で済めるようになり、食事やその前後の団らんのなかで交わされていた情報交換の役割をテレビが担うようになった。その後、つぎつぎに新しい電化製品が登場し、人々の生活は便利になった。電子レンジや食器自動洗い機などが登場して家事の時間はますます節約され、建築技術や冷暖房機器の改良によって居住空間は密閉されて快適になり、外界とカクゼツされるようになった。コンビニエンスストアやファーストフードの店があちこちにできたおかげで、いつでも好きなときに簡単に食事ができ、必要なものなんでも手軽に入手できるようになった。家用自動車をだれもが手に入れられる時代になり、気の合った仲間と好きなときに、他者に気兼ねすることなく自由に移動できるようになった。ちよつと前までなにをするにも人々にたずね、協力を仰ぎ、他者の目を気にしながら時間をかけて行っていた作業を、自分の都合を第一に考慮しながら自分で決定できるようになったのである。なんという a 世の中になったことか。

しかし半面、それは人間が数百万年をかけて培ってきた重要な能力や社会性を失わせる結果をもたらしているのではないだろうか。長い狩猟採集生活のなかで発達させた「分かち合い」の精神は、農耕や牧畜の社会になっても食の共同をつうじて生き残ってきた。信頼できる仲間と毎日顔を合わせることで、心のきずなは保たれてきた。だが、現代はだれとも顔を合わせなくても、言葉を交わさなくても生きていける。通信販売で必要なものはすべて手に入るし、近くのコンビニエンスストアで目的の品を無言でレジへもっていけば、言葉を発することなく購入できる。

パソコンを開けば、そこには無限の世界が広がっている。会ったこともなく、名前も知らない相手と親密な対話ができるし、自分の経歴や身分を明かさずにつきあうことができる。同好の仲間を集めてグループをつくり、顔を合わせないままにインターネットのなかで会話を楽しむことができる。ギャンブルや投資も可能で、一步も部屋から出ないでお金を稼ぐことができる。インターネット上に意見を書き込んだり、選挙の投票も可能なので、政治活動にも主体的に参加することができ。言葉はもはや生身の体とは離れて人々を動かすようになっていく。

そういったコミュニケーションと生活様式の変化による影響をもつとも大きく受けたのが家族ではないかと思う。おそらくホモ・エレクトスの時代に完成した家族という社会単位は、植物食から肉食をとりいれた雑食へと食物が変わっても、移動を基本とする狩猟採集生活から食料を生産する定住生活へ変わっても、即時収穫システムから遅延収穫システムへと経済が変わっても、集団の規模が数十人から数万人へと変わっても、つねに社会の基本的な組織として命脈を保ち続

けてきた。それはどの時代でも、どの条件でも、社会をつくる資本は共感にもとづく信頼関係であり、それをたがいに顔と顔を合わせるコミュニケーションがつくってきたからである。

人間が言葉を使わなくても共鳴し合える共鳴集団の規模はいまだに一〇〜一五人である。これはゴリラの集団の平均的な大きさと変わらないし、人間の家族の大きさとも一致する。人間がゴリラとちがうのは、家族以外にそういった共鳴集団を複数もてるようになったことだ。家族に属し、会社の仲間と共同で仕事をし、スポーツの仲間と集まる。私たちは日々そういった共鳴し合える集団を^(*)ヘンレキしながら過ごしている。言葉はその集団の維持に大きな役割を果たしているが、言葉以外のコミュニケーションも不可欠である。顔を合わせなければ、声を聞かなければ、いっしょに食事をしなければ、信頼関係を保ち続けることはむずかしい。

^F現代の通信革命は、そういった近距離のコミュニケーションの役割を大きく減退させてしまった。インターネットや携帯電話のほうがお手軽で便利だからである。かくして人々は顔を合わせなくなり、声をかけ合わなくなった。家族であってもいっしょに食事をする機会が減り、向かい合ってテーブルについてもたがいに携帯電話で話をしながら食べる。顔をみつめ合うこともない。相手は自分の見知らぬ人と携帯電話でつながっているから、いっしょに話をしていても心の動きを読めない。目の前にいる相手を信頼することができず、いっしょに食事をしたり、会うことすら億劫になる。しかし、独りでののはさびしいのでいっしょにいる友達がほしいし、自分が孤独であることをみなに知られたくない。そういったジレンマにだれもが陥っているようにみえる。いままで長いあいだ、人々の信頼をつなぎ止めていた共感という感情が行き場を失ってさまよい始めているのである。人々がスポーツの観戦やコンサートへ出かけて熱狂するのは、その満たされない思いを発散しようとしているのではないだろうか。

^Gしかし、それは安易な共感の発露であるように私は思う。好きなチームの活躍に一喜一憂し、観客たちとウェーブをつくれれば、多くの人々と心を一つにできる。でも感動する自分はいくまで受身である。自分はなにも犠牲にしないし、傷つかない。だれかを助けたり、幸福にしたりすることにも直接結びつかない。共感特別な状況におかれた特定の相手に対して向けられるものであり、人々のあいだに助け合いや協力をもたらす装置だった。人間にとって共感を育む器は家族であり、それをとりまく人々の輪が共感を向ける対象だった。現代の人々は便利な電化製品や通信機器に囲まれて自立した生活を満喫する一方、隣人との接触を減らし、共感を向ける特別な相手を失いつつあるのだ。^Hこの状態を放置しておけば、社会を支えてきた人々のきずなは緩み、ばらばらになって收拾がつかなくなる怖れがある。

(山極寿一『家族進化論』による。ただし一部変更した。)

問一 傍線(ア)～(オ)のカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 15 ～ 19。

(ア) ソクシン

15

- ① アンソク¹の地をつくり出す
- ② 借金の返済をサイソク²する
- ③ 南極カンソク³船
- ④ 衣冠ソクタイ⁴
- ⑤ ヘイソク⁵感に満ちた時代

(ウ) コブ

17

- ① タイコ¹持ちを演じる
- ② 帝国のエイコ²盛衰
- ③ 金融機関の貸キンコ³
- ④ 論よりシヨウコ⁴
- ⑤ 王政フツコ⁵の大号令

(オ) ヘンレキ

19

- ① 学歴ヘン¹チヨウ²が招く問題
- ② 四国でおヘン³ロ⁴さん⁵を見かける
- ③ ガラスのハヘン⁶を踏む
- ④ 直角三角形のシャヘン⁷の長さを求める
- ⑤ 組織サイヘン⁸が求められる

(イ) ソウゴン

16

- ① カソウ¹の煙が立ちのぼる
- ② クウソウ²にふける
- ③ コクソウ³地帯が広がる
- ④ 山でソウナン⁴する
- ⑤ 避暑地にベツソウ⁵を建てる

(エ) カクゼツ

18

- ① ナイカク¹総理大臣
- ② 利権獲得をカクサク²する
- ③ 牛のヒカク³を加工する産業
- ④ 昔を思うとカクセイ⁴の感がある
- ⑤ 軍備をカクチヨウ⁵する

問二 傍線A「これは人間にしかできない行為」とあるが、「これ」はということを指すか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 20。

- ① 顔を合わせる対面コミュニケーションによって、相手の感情を読み、相手の行動を操作すること。
- ② 一々メートルの距離を置いて対面し、相手の目の動きによってその感情を読み、共有すること。
- ③ 人間以外の霊長類においてけんかの源泉である食物を挟んで、長時間相手の顔をみて向かい合い、食物を分かち合うこと。
- ④ 情報を伝え合うときには必ず向かい合って至近距離で対面し、その対面姿勢を長時間続けること。
- ⑤ 争いを回避するために、しぐさと音声において類人猿とちがうコミュニケーションを取ること。

問三 傍線B「人と人との感情の共有が目的意識に結びつくようになった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 21。

- ① ほかの仲間との境界を消して喜びや悲しみの感情を分かち合っていた音楽が、言葉と結びついたことによって、人々の連帯意識を高め、分業や共同作業を推進するといった目的をもつものとなったこと。
- ② 人々を信頼させ連帯させる力はなかった言葉が、音楽と共に用いられることで感情に訴えかける力を得て、信頼関係づくりのために用いられるようになったこと。
- ③ 音楽はもともと人間が言葉以前に発達させたコミュニケーションであったが、言葉と共に用いられることで、他人どうしの連帯感を高める装置となり、おびただし数の軍歌がつけられたこと。
- ④ 連合することなど考えられなかった他人どうしを結びつけ、社会のために命を捨てて奉仕するような精神の育成に、音楽と言葉の結びつきが貢献するようになったこと。
- ⑤ 音楽と言葉が結びついたことによって、仲間どうしのきずなを強め一体化する気持ちを高めるということ自体が、偶然もたらされる結果ではなくはつきりとした目的となったこと。

問四

傍線C「文字は言葉を化石化し、繰り返しや保存を可能にする耐久性の高い装置である。」とあるが、それはどうということか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 22。

① 文字は、昨日起こったことをいましがた起こったことのように、遠い場所で起こったことを目前で起こったことのように記録できる仕組みを備えており、遅延収獲システムを発展させることを可能にするということ。

② 文字は、粘土板、皮、紙といった媒体に記されることで、できごとの善し悪しの原因を過去にさかのぼって問い、その方法を改善し、新たな目標を立てる思考様式を推進できる仕組みを有しているということ。

③ 文字は、音声とは違って、書き記されることで言葉を変化しないものとして固定し、時間と空間を超えて参照可能なものとしてその言葉伝える仕組みを有しているということ。

④ 文字は、粘土板、皮、紙といった媒体に記されて保存されることによって、生身の体とは離れて、自分にとって未知のことを他者の体験から学ぶことができる教材となったということ。

⑤ 文字は、相手の目の動きによってその感情を読むという人間特有の能力を失わせることと引きかえに、所有や交換のための証文や、共同作業の分担や手順を明確化するマニュアルになったということ。

問五

空欄aに入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 23。

① 安全な ② 情報過多な ③ 複雑な ④ 孤独な ⑤ 自由な

問六 傍線D「人間が数百万年をかけて培ってきた重要な能力や社会性」とあるが、その内容の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 24。

① 人間は、顔を合わせる相手と頻繁に情報交換を実施するコミュニケーション能力を育み、信頼できる仲間と片時も離れずに生活することで、心のきずなを保ってきた。

② 人間は、相手と直接対面して目の動きを手がかりに、その心を読んで感情を共有するコミュニケーション能力を育み、共感にもとづく信頼関係をつくってきた。

③ 人間は、共同の子育てをするために必要な、家族のきずなを強めるコミュニケーション能力を育み、平等に生殖する権利を保ってきた。

④ 人間は、自分のアイデンティティを明らかにしたうえでさまざまな集団を行き来するコミュニケーション能力を育み、見返りを求めずに助け合ってきた。

⑤ 人間は、許し合うことを基盤とするコミュニケーション能力を育み、類人猿と比べて手のかかる子どもを、協力し合って育児してきた。

問七

傍線E「コミュニケーションと生活様式の変化による影響をもっとも大きく受けたのが家族ではないか」とあるが、著者がそう考える理由として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

① 人口や集団の人数を増やすにつれ、人類はその社会の根本となる組織である共鳴集団の規模を大きくしてきたが、言葉を使わなくても共鳴し合える家族という共鳴集団を成立させてきた従来のコミュニケーションと生活様式が、それによってもっとも大きく変化してしまっただから。

② 家族は、おそらくホモ・エレクトスの時代に完成し、食物や経済、集団の規模が変わってもつねに社会の基本的な組織でありつづけてきたが、生活様式が変わり、いつでも好きなときに好きな集団で過ごせるようになったことで、家族が社会を支える社会単位であるという認識が変わってしまったから。

③ 人口や集団の規模が大きくなっても、言葉を使わずに共鳴し合える共鳴集団の規模は長い間家族の大きさと一致していたにもかかわらず、現代では家族以外にそういった共鳴集団が複数存在できるようになってしまい、家族はコミュニケーションと生活において必須の存在ではなくなってしまったから。

④ 規模の大きな集団とは異なり、共鳴集団の規模と一致して社会の基本的な組織でありつづけてきた家族の成立と維持には、顔と顔を合わせるコミュニケーションが必要不可欠であったが、現代特有のコミュニケーションと生活様式によって、その家族のきずなを保つための基盤がゆらいでしまったから。

⑤ 集団の規模が数十人から数万人へと変わっても、家族にのみみられる「分かち合い」の精神が、家族を成立させるには不可欠であったのに、現代特有のコミュニケーションと生活様式によって家族と顔を合わせる必要がなくなると、その「分かち合い」の精神が育まれなくなってしまったから。

問八

傍線F「現代の通信革命は、そういった近距離のコミュニケーションの役割を大きく減退させてしまった。」とあるが、その結果どのようなことが起こったか。本文中に挙げられている例として適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

① 多様な方法で情報取得や会話が可能になったため、対面コミュニケーション能力を鍛える必要がなくなった。

② 食事やその前後の団らんのなかで対面して会話を交わし、時間をかけて情報を交換することがやっかいに感じられるようになった。

③ インターネット上では、人々が個人情報を明かさず知り合い、顔も合わせずにつきあうことのできる集団が成立するようになった。

④ だれとも顔を合わせなくても、言葉を交わさなくても生きていけるようになり、ひきこもりという新たな生活スタイルが登場した。

⑤ 目の前にいる相手を信頼できずいっしょにいるのが億劫になる一方、自分が孤独になりたくないというジレンマを抱えるようになった。

問九 傍線G「安易な共感の発露であるように私は思う」とあるが、著者がのように述べる理由として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

から一つ選べ。解答番号は 27。

① スポーツ観戦やコンサートへ出かけて熱狂し多くの人々と心をつなぐにしても、それは受身の共感であり、同胞意識や戦闘意欲を高めるために成立した、できて日が浅いコミュニケーションにすぎないから。

② スポーツ観戦やコンサートへ出かけて熱狂し多くの人々と心をつなぐにしても、その行為では、特定の相手と顔を合わせてじっくりと向かい合うことで信頼関係を築くという、共感の本来の働きは遂行されえないから。

③ スポーツ観戦やコンサートへ出かけて多くの人々と心をつなぐことは、日常生活で孤独を感じる理由を考えずにその時だけの熱狂に身を任せることであり、そこに瞬間的な楽しさはあるけれども、結局快適な生活を楽しんでいるだけだから。

④ スポーツ観戦やコンサートへ出かけて熱狂し多くの人々と心をつなぐことは、その場に出かけさえすればだれでも簡単にできるが、その集団はなんのまとまりもない一回きりのものであり、緊密な情報交換を行う関係を築くことは不可能だから。

⑤ スポーツ観戦やコンサートへ出かけて熱狂し多くの人々と心をつなぐと、満たされない思いを発散できていると感じてしまうが、孤独であることを知られずに、人といっしょにいられるのはその場にいるときだけで、振り返るとむなしいだけだから。

問十

傍線H「この状態を放置しておけば、社会を支えてきた人々のきずなは緩み、ばらばらになって收拾がつかなくなる怖れがある。」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

① 言葉以外のコミュニケーションが減り続けると、人と人のきずなを修復することが不可能になり、人々は家族の築き方がわからなくなつたまま、少子化の進む社会で絶望して生きていかなければならないかもしれないということ。

② 便利な電化製品や通信機器に囲まれた生活を満喫し、人々が子育てに積極的にならない状態を放置しておく、その結果共同体が個人を縛れなくなり、これまでの家族を維持できなくなつて、人間社会におけるすべての共同体が崩壊するかもしれないということ。

③ 共感を育む場としての家族のきずなや、共感を向ける特別な相手との接触が失われるに任せておくと、人々のあいだに共感にもとづく信頼関係が築けなくなり、助け合いや協力が消滅して社会が立ちゆかなくなつてしまうかもしれないということ。

④ 家族や親しい相手と食を共にせず、共感を向ける対象が失われるに任せておくと、共同体を作ることが不可能になつてしまうので、スポーツ観戦やコンサートにも出かけられないほど人間社会の治安が崩壊してしまうかもしれないということ。

⑤ 社会において隣人との接触が減り続けると、どこにもきずながない社会になつてしまい、人間は他者と共感にもとづく信頼関係を築くことができず、孤独を抱えてさまよい続けなければならない存在になつてしまうかもしれないということ。



三

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

坂東のある山寺の別当^注、学匠にて、弟子・門徒多かりけれども、年たけて、中風し、床に臥して、身は合期^注せずながら、命は長らへて、年月を送るままに、弟子ども、看病し疲れて、果ては打ち捨ててける。いづくともなく、若き女人一人来て、御看病申さむ事いかにといへば、弟子ども、然るべしとて許し、えもいはずねんごろに看病しける。いかなる人ぞと問へども、まどひものにて候。人^Aに知られ参らすべき者にも非ずとて、つやつや名^aのらず。

余りに有り難く看病し、月日も経にければ、この病人申されけるは、仏法・世法の恩を蒙る年来の弟子¹だにも、捨てて侍るに、これ程にねんごろに看病し給へるは、然るべき先世の契にこそとまで有り難く思ひ給へるに、いたく隠し給ふ事こそいぶせけれ。そもそも、いかなる人にておはすぞとあながちに問ひければ、この女人申しけるは、実に今は申し侍らむ。これは、そのかみ、思ひかけぬ縁にあひて、思ひの外なる御事の候ひける、某と申す者の女なり。其れには知らせ給はねども、母にて候ふ者の、汝はかかることにてありと申ししかば、我が身には、心ばかりは、御女と思ひ給へて、あれ、見たてまつり、見えたてまつらばやと、年来思ひ侍りつるに、この御病に、御看病の人も疲れて、事欠けたると承りて、御孝養に、心安く、あつかひ殺し奉らむと、思ひ立ちて候ひつると、泣く泣く語りければ、病人も、まめやかに、志⁵のほどの、哀れに覚えて、涙もかきあへず。然るべき親子の契こそ、哀れなれとて、互ひになつかしき事にて、終に最後まで看病せられて、心安く終りにけり。^C
かの至孝の志こそ、有り難く覚え侍れ。

『沙石集』による。ただし一部変更した。）

(注) 別当：僧侶の職名。

(注) 合期せず：思うようにならないこと。

問一

傍線 1 「弟子だにも」、傍線 2 「いぶせけれ」、傍線 5 「まめやかに」の意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ～ 31。

1 「弟子だにも」

29

- ① 弟子たちも
- ② せめて弟子だけでも
- ③ 弟子でありながら
- ④ 弟子さえも
- ⑤ 弟子ならば

2 「いぶせけれ」

30

- ① 良い雰囲気だ
- ② 釈然としない
- ③ 不思議だ
- ④ ためらわれる
- ⑤ 恐ろしい

5 「まめやかに」

31

- ① 細々と
- ② 苦労しながら
- ③ 心から
- ④ 目の当たりに
- ⑤ はりきって

問二

傍線 3 の「む」と文法的意味が同じものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 勝たむとうつぶからず。
- ② 月のいでたらむ夜は、見おこせ給へ。
- ③ 少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。
- ④ とくこそ試みさせ給はめ。
- ⑤ 女は春をあわれむ。

問三

波線 A 「人に知られ参らすべき者にも非ず」、波線 B 「有り難く思ひ給へる」、波線 C 「看病せられて」の主語として最も適切なものを、次の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は波線 A 33、波線 B 34、波線 C 35。なお必要ならば同じ記号を何度用いてもよい。

- ① 若き女人
- ② 母にて候ふ者
- ③ 弟子ども
- ④ 山寺の別当

問四

二重傍線 a 「つやつや名のらず」、二重傍線 b 「見えたてまつらばや」の意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 36・37。

a 「つやつや名のらず」

36

- ① 片時も名誉を傷つけない
- ② 少しも名を覚えていない
- ③ まったく名のらない
- ④ どうにも気乗りしない
- ⑤ 結局家を継がない

b 「見えたてまつらばや」

37

- ① お世話申し上げたい
- ② 綺麗にしてさしあげたい
- ③ 気持ちを露わにし申し上げたい
- ④ 何とかして拝見したい
- ⑤ 見られ申し上げたい

問五 傍線 4「そのかみ、思ひかけぬ縁にあひて、思ひの外なる御事の候ひける」の解釈として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 38。

- ① 昔、私は思いがけない縁で母を捨てた別当とめぐりあつて、とつさに復讐を果たそうと考えました。
- ② 昔、私の母は思いがけない縁で別当とめぐりあつて、予想外にも契りを結び私を生みました。
- ③ 昔、私の母は思いがけない縁で仏教とめぐりあつて、薄情にも修行のために私を捨てました。
- ④ 昔、弟子の一人が思いがけない縁で私の母とめぐりあつて、期せずしてその看病をするようになりました。
- ⑤ 昔、別当は思いがけない縁で私とめぐりあつて、たまたま一緒に暮らすようになりました。

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし解答の順序は問わない。解答番号は

39・40。

- ① 山寺の別当は、流行病にかかった弟子たちの世話をしたが、自身も病氣にかかつてしまった。
- ② 山寺の別当は、若い女に看病されていたが、最初はそれが実の娘であるとは知らなかった。
- ③ 山寺の別当を看病した女は、仏道修行をするため幼少期に生き別れた実の母親だった。
- ④ 弟子たちは山寺の別当の看病を放棄したが、若い女は別当が亡くなるまで看病しつづけた。
- ⑤ 山寺の別当には身寄りがひとりもいなかったが、弟子たちが看病をして、病氣を治した。
- ⑥ 若い女は、山寺の別当を、自分を捨てた恨みから看病するふりをして殺そうとした。

(こ の ペ ー ジ は 白 紙 で す)

(こ の ペ ー ジ は 白 紙 で す)